

事態が発生しえた。単純な操作ミスであるが、数分後には患者さんが亡くなってしまふ。麻酔の歴史の中でも最も悲惨な事故が当時、少なからず発生していた。

学生時代に、まだ自分が麻酔科医になるとは思っていなかったが、麻酔で亡くなった従兄弟のことはときどき思い出していた。自分の死を無駄にしないようにしてくれという従兄弟の声が無意識の闇から聞こえていたのだろうか。私は、従兄弟の麻酔死で麻酔と接点ができ、従兄弟の「自分と同じような目に患者さんを遭わさないでくれ」という黄泉からの叫びに導かれるように、麻酔科医になった。

2 最初に出会った麻酔科医

私が初めて麻酔科医と出会ったのは、大学二年の時(昭和四八年)だった。当時、ワンダーフォーゲル(ワンゲル)部に所属していた私は、夏合宿の医療班として山で事故にあった時の救急処置の講習会を計画するように割り当てられた。そしてワンゲル部の先輩からN先生を紹介され、教養部の六本松キャンパスで行われた講習会でN先生にお会いする機会

3 出張ランニングのすすめ

私は中学校時代に駅伝部に入った。足がさほど速かったわけではないが、東京オリンピックのテレビ放送でマラソンのアベベの走りを見て、魔法にかけられたみたいに私は走り出した。

駅伝部の監督は鬼のYと呼ばれていて、授業が延びて練習に遅れる部員がいると、その教室に怒鳴り込んで行くほどの熱血漢だった。学校を欠席している部員がいるとその子の家までみんなで走っていった。駅伝の練習メニューは毎日Y先生が作った。

ある日、練習の途中でY先生が現れ、冗談を言いながら走っている私たち部員の姿を見て「真剣さが足りない。今日で駅伝部は解散する」と言った。部員のみんなが喜んだ。もうきつい練習をしなくともいいと思うとみんなが万歳と叫ぶ思いだった。しかし、三日後に私たちはY先生の所に行き、「もう一度走らせてください」と頭を下げていた。

駅伝大会に出られるのは学年で二人であり、同学年にY君とM君がいて、二人は九州大会でもトップを争うぐらい速かったので、私が大きな大会に出ることはなかった。大会が